

(海外最新事情)

イギリス

植えてはいけない帰化植物

チェルシー・フラワー・ショウが今年も開催される。(この『語研ニュース』が出る頃にはすでに過去形になっているが。)これはロンドンの高級住宅街チェルシーにある病院の敷地内で毎年5月下旬に、王立園芸協会(Royal Horticultural Society)の主催で行われるもので、すでに140年を超える歴史があり、例年15万人以上の園芸愛好家が世界中から集う。

RHSの200周年に当たる今年のフラワー・ショウでは、その会場となる巨大パヴィリオン正面に、異例の「警告文」が掲示されるという。それは特に英国内の庭師や愛好家に向けた「植えてはいけない」植物を列挙したものである。ここに挙げられているのは外国産の繁殖力の強い植物であり、その強すぎる繁殖力の故に英国原産の植物を淘汰し、英国の生態系を破壊しかねないと危惧されている。例えば北アフリカからユーラシア大陸にかけて分布するオドリコソウ(dead nettle)や北アフリカの地中海沿岸のニオイカントウ(winter heliotrope)、南アフリカのヒメヒオオギスイセン(montbretia)などである。ダーウィンは『種の起源』(1859)の中で、島国原産の動植物よりも大陸原産の動植物の方が「強い」ことを指摘しているが、ここでリストアップされている植物の多くも大陸原産のものである。一つだけ、19世紀中頃に日本から入って行ったニワヤナギ(knotweed)が含まれているが、これはすでにイングランド南西部(特にコーンウォール州)に繁殖していて、イングランドの他の地域やウェイルズにも広がりつつあるという。この問題について

はすでに、コーンウォール・ノットウィード・フォーラムという会が結集され議論されている。

これらの帰化植物が繁殖した背景には「インスタント・ガーデン」の普及がある。このリストに挙がっている植物の多くは、手軽に短期間で庭を完成できるとして、園芸店などで盛んに販売されたものである。生育が早く繁殖力が強い故に、いずれ増えすぎて抑制が利かなくなり、それが個人宅の庭だけでなく自然界にも侵出するのである。しかし庭造りは急いではいけないのであり、一年や二年くらいは草花が生えない状態を気長に我慢しなければならないと、今回の警告に関係した生態学者トレヴァー・リーナルズは言う。チェコの作家カレル・チャベックもまた名著『園芸家十二月』で、庭を造る者は十年後、五十年後を見据えて気長な作業を続けなければならないと言っている。

植物だけでなく動物の世界でも、例えば英国原産の赤リス(red squirrels)がアメリカ原産の灰色リス(grey squirrels)に淘汰されつつあるという憂慮すべき事態が生じている。ロンドンの中心部に近い公園でもリスの姿をよく見かけるが、あれはすべて灰色リスである。一方日本でも1970年代以降、アメリカ原産のブタクサとセイタカアワダチソウが元来の生態系を破壊しようとしている。前者は花粉症を引き起こし、後者は日本の伝統的な秋の風景を著しく損なう。

(安藤 聡)

アメリカ

英語の男女差における新たな局面

ことばの男女差は、フェミニズムの台頭に伴い、かれこれ30年以上前から性差別の温床と見なされ、PC (politically correct) 活動の重点課題として、特にアメリカ英語において、ニュートラルで性差を連想させない表現を社会内に流通させる原動力となってきました。たとえば、chairman => chairperson, chair; steward/ess => flight attendant; girls => women といったように。何が問題だったかといえ、"-man" で人間一般を代表させて女性を隷属的存在と見たり、性差と職業選択の固定化を助長したり、女性全般を未成年または性的な対象として連想させる視点にあったといえるでしょう。そのような言語的差別を正すべき立場にある言語学の教科書にさえ、そこで用いられる例文には「男性が主語で女性が目的語になりやすい」とか (Ben gave the book to Debbie.), 「女性を無能な人間とみなす例が多い」とか (She proved to be a disaster. [disaster = 最悪の人]), 「男性が (知的活動の代表である) 『読書をする』 ことの主語になりやすい」 (The boy read the paper.) といった傾向が指摘され、この問題の根の深さを感じさせます。このような性差別的なことば (sexist language) は日本でもひところ激しく糾弾されたものですが、「男ことば」「女ことば」が生活や文化における規範と深く結びついている日本では、欧米流のフェミニズムをそのまま取り入れることに対して異論も噴出しました。本稿では、英語の男女差をこのような政治的な側面から見るのではなく、近年明らかになった言語学的・生理学的な性差をご紹介します。

言語使用における男女差はさまざまな機会に指摘され、有名なところでは、言語学者のタネン (D. Tannen) のように、男性と女性がわかりあえないのはコミュニケーション規範を共有しない異なる「文化」に住むからだ、という提案などがありました。(もちろんこの意見にも異論は続出しま

した。) ひと頃男女差に触れることはタブー視していたメディアも、このところ、客観的・科学的手法を用いて明らかになった言語使用上の男女差を指摘し始めています。たとえば、BBC News (2000年11月28日) では、「男女間のいさかいを引き起こしたくはないが」とのアメリカの研究者の引用を紹介しながら、「男性は話を左脳でしか聞かないが、女性は左右の脳で聞く」という fMRI (functional magnetic resonance imaging) の結果を報告しています。確かに、左右の脳をつなぐ脳梁は、末端部が女性のほうが太くてより効率的に情報をやり取りするというのは生理学的事実です。数年前に『話を聞かない男、地図が読めない女』 (Allan Pease, Barbara Pease 著) がベスト・セラーとなったのも、その原因を脳の機能の差に求めた点にあるのでしょうか (ただし彼ら自身がそのような研究したわけではありません。)

ところが最近、会話ほど男女差が現れないと思われる書きことばにおいても、明らかな男女差があることがわってきました (KR Washington Bureau 2003年5月23日)。イリノイ工科大学の Shlomo Argamon 博士によれば、統計的に見て女性は "with" や "for" といった関係性を重視する機能的語彙を用いる傾向があり、より相互交渉的なスタイルを好むことがわかったそうです。一方男性は、数字、形容詞、限定詞 (the, this, that など) を多用して具体的な情報を提示する傾向があるといます。Argamon 博士らは British National Corpus と呼ばれる膨大なテキスト資料から566冊の小説・記事などを選び、その200万語のデータから128に及ぶ統計的に有意差のある特徴を抽出しました。これらの特徴を用いると、80%の確率で著者の性別を判定できるとのことです。

たしかに、差異をことさら強調することは差別につながりかねません。しかし、同等の権利と自由をもって共存していくためには、個人間、コミュニティー間、地域間、民族間などに差異があることを認めることが、ステレオタイプ化と偏見の是正に向けた第一歩といえるでしょう。(片岡邦好)

フランス

オルレアン市の近況

愛知大学の提携校の一つオルレアン大学があるオルレアン市は、交通の要所であり、サントル地方の文化、政治、産業の中心地として栄えてきた。また、英仏百年戦争中1429年のジャンヌ・ダルクによるオルレアン解放などでも知られる歴史のある都市であると同時に、人口の30%近くを20歳未満の若者が占めるといふ若さを秘めた都市でもある。そのオルレアン市がもっとも力を入れている施策の一つに国際交流がある。現在、世界各地の14都市と姉妹都市提携をしているが、その中に宇都宮市が含まれている。今年（2004年）は宇都宮市との提携15周年目を迎えるとのことで、7月にはオルレアン市長をはじめとする使節団が宇都宮を訪問することになっている。また、現在、オルレアンからフランス人剣道家を宇都宮に派遣しており、来年は宇都宮からオルレアンに日本人剣道家を派遣することになっているそうである。

このような姉妹都市との交流のほか、国際フェスティバルの開催にも力を入れようとしている。フランスでの国際フェスティバルといえばカンヌの映画祭やアヴィニヨンの演劇祭などが有名であるが、オルレアン市の場合はそのような特定の分野のフェスティバルを毎年催すということではなく、年度ごとに分野あるいはテーマを設定するという方式をとっているらしい。今年はピアノ・フェスティバルが予定されており、来年は日本茶フェスティバルが予定されているということである。ちなみに、オルレアン市周辺には日立や資生堂など日本企業が進出していることもあって、日本との関係が深い地域である。

ところで、オルレアン市には路面電車が走っている。これは、1997年に採択された温室効果ガス削減のための京都議定書を受けて、1999年1月に着工、2000年11月20日に開通したものである。高加速、高減速、低騒音、超低床のいわゆるLRT (Light Rail Transit) で揺れもほとんどないか

ら、乗り心地は非常によく、水平飛行中の旅客機に乗っているような気分になることさえある。2両編成の車体の色はやや紫色がかった薄い茶色であるが、夜見るとライトグレーに見える。実は、この路面電車の車内にはフランスらしい仕掛けがしてある。自転車を持ち込んで乗った時に、車輪をはさんで自転車を固定するための矩形の金具が備えられているのである（表紙の写真を参照）。自転車王国の面目躍如といったところであろう。

(田川光照)